

2020 年度 入学試験問題

国 語

(第 4 回)

[注意]

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 解答用紙は、問題冊子の中にはさんであります。試験開始の合図があったら、解答用紙を取り出して受験番号と氏名を記入し、QRコードシールをはりなさい。
3. 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
4. 問題冊子の余白等は自由に使って構いません。
5. 試験終了後、解答用紙のみ提出し、問題冊子は持ち帰りなさい。

東京都市大学附属中学校



【注意】国語の問題では、字数制限のあるものは、特別な指示がない限り句読点等も一字に数えます。

1 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

いま、島田清次郎という小説家を知っているのは、近代文学を専門にしている研究者くらいであろう。その『地上』（大正八年）という作品が天下の話題になったのを知る人はもうほとんどなくなろうとしている。

島田清次郎は大正の文学青年から見て、まさに天才であった。それを疑うものはすくなかった。それがどうであろう。僅か六十年にして、ほぼ、完全に忘れられてしまった。当時としては、

A、夏目漱石の文学について疑問をいだくものが多かった。批判もすくなくなかった。それがいまでは国民文学として、近代文学において、比肩するものなしといわれるまでになっている。

大正の※中葉において、現在のことを予測し得たものはほとんどなかったと言ってよい。流行というのはそれくらい人の目をくるわすものである。「現代」はいつの時代においても不_a可解である。古い時代のことはよくわかる。あまり大きなケントウ違いはもうおこらない。それなのに、^①何でも直接に見聞して知っているはずの現在のことが実にわからない。まれにわかったと思うと、とんでもない判断をしてしまう。

文学史家はこのことをよく承知している。ときに、現代文学史を試みる人もないではないが、だいたいの史家は、現代に近づくことをおそれる。三十年、五十年前のところまで、筆を止めるのが普通になっている。

それでも、新しいところへさしかかるにあたっては、「まだ、これらの作家、作品は、時の試練を経_へていない。いま不用意にその軽重をあげつらうことは慎_つしまなくてはならない」といった意味の常套句をかならずと言ってよいほど用意しているものだ。

その裏には、おびただしい失敗例がごろごろしている。なぜ、いちばんよくわかっているはずの目の前_のことがそれほどわからないのか。ひとつには、それまでの考え、それにもとづく流行の色眼鏡をかけて見ているからである。まわりがひとしくかけている眼鏡をはつきり一時的なものと看破することは難しい。そのメガネ越しでは、新しいものがあらわれても見えない。たとえば、怪奇な姿_{すがた}にうつるであろう。とうてい真の価値を見ることはできない。

もうひとつは、新しいものが、あまりにも新しいことが、本来の姿でない姿をさせていることがある。大工は生木で家を建てない。新しい木はいいようであるが、建築材料にはならない。乾燥してくると、ゆがむからである。変形する前の生木は、木材としては、いわば、仮の姿である。時間をかけて変わるべきところは変わらせてからでない_と、家を建てることはできない。

新しい文学作品についても、ほぼ同じことが言える。作者の手を離れたばかりの作品は、生木に当る。それは文学史という家を作るにはまだ新しすぎる。時の試練を経_たさせて、風をあて、乾燥させる必要がある。

時間が経てば、たとえ微妙_{びじょう}でも、風化がおこる。細部が欠落して、新しい性格をおびるように

なる——これが古典化の過程である。原稿のときとまったく同じ意味をもったままで古典になったという作品は、古今東西、かつてなかったはずである。B、時のふるいにかけられて、落ちるものは落ちて行く。

ときには、作品そのものが埋没してしまふことがあるかもしれない。発表当時は、天下の耳目をそばだたせた島田清次郎『地上』が半世紀もたたないうちに、まったく忘れられてしまったのはその一例である。湮滅こそ免がれはしたものの、生木のときとは、大きく違ったものになったという場合もないではない。

スイフトの『ガリバー旅行記』は十八世紀の作品である。もともとは当代の政治情況に対するきびしい諷刺であった。ところが、次の時代からすでに、読者にわからないところが出てきて、これは時代が下るにつれてますます多くなった。一般に諷刺というものは、風化が急速に進むのが一般である。やがて、『ガリバー旅行記』を諷刺として読む人はなくなった。そこでこの作品は忘れ去られてもよかったのである。

C、新しい読み方が行なわれるようになって、これをリアリズムの童話に変身させた。それとともに、『ガリバー旅行記』の古典化が起った。政治諷刺であることをやめてはじめて、世界的なひろがりの読者層をもつことができるようになったのである。

『時の試練』とは、時間のもつ風化作用をくぐってくるということである。風化作用は言いかえると、忘却にほかならない。古典は読者の忘却の層をくぐり抜けたときに生れる。作者自らが古典を創り出すことはできない。

忘却の濾過槽をくぐっているうちに、どこかへ消えてなくなってしまうものがおびただしい。ほとんどがそういう運命にある。きわめて少数のものだけが、試練に耐えて、古典として再生する。持続的な価値をもつには、この忘却のふるいはどうしても避けて通ることのできない関所である。

この関所は、五年や十年という新しいものには作用しない。三十年、五十年すると、はじめてその威力をハッキリする。放つておいても五十年たってみれば、木は浮び、石は沈むようになっている。

これを自然の古典化とするならば、人為による古典化作用ともいうべきものもある。自然の古典化は、長い時間の流れを必要とする。放つておいても古典化は起るかわりに、一生かかっても完了しないおそれがある。もっと短い時間で、時の試練を完了させることはできないものか。

とくに努力しなければ、古典化には三十年も五十年もかかる。その時間を短縮するには、忘却を促進すればよい道理である。自然に忘れるのにまかせておかないで、忘れる努力をする。* 前章でのべたように、頭の中をたえず整理し、忘れやすいようにするならば、忘却の時間はいちじるしく短縮できるであろう。

▼ 一時の思いつきは、当座は、いかにもすばらしい。しかし、それは、Iのアイディアである。早く水分を抜いてやらないといけない。メモに書く。書けば安心する。安心すれば忘れやす

い。しばらくして、見返す。ほんの十日か二週間しかたっていないのに、もう腐りかけているのがある。どうしてこんなことをことごとしく書きつけたりしたのかと首をひねる。風化は進んでいるのである。

ノートへ移してやるのはいわば、第一次の試練にパスしたものである。これも、しばらくして再検討すると、やはり、おもしろくなくなってしまうものが出てくる。

これが第二次のⅡである。ここを通り抜けたものを、前に紹介した※メタ・ノートへ移す。こうして、変わらないものを見つけに行く。逆から言えば、変わりにくいものを忘れて行く。

忘却は古典化への一里塚いちりづかということである。なるべく忘れた方がいいと言っているのも、個人の頭の中で、古典的で、フドウの考えを早くつくり上げるには、忘却が何よりも大切だからにほかならない。

思考の整理には、忘却がもつとも有効である。自然にユダdねておいては、人間一生の問題としてあまりにも時間を食いすぎる。それかといって、生木の家ばかりいくら作ってみても、そこそ時の風化に耐えられないことははっきりしている。

忘れ上手になって、どんどん忘れる。自然忘却の何倍ものテンポで忘れることができれば、歴史が三十年、五十年かかる古典化という整理を五年か十年でできるようになる。時間を強化して、忘れる。それが、個人の頭の中に古典をつくりあげる方法である。

② そうして古典的になった興味、着想ならば、かんとんに消えたりするはずがない。
思考の整理とは、いかにうまく忘れるか、である。

(外山滋比古『思考の整理学』より)

※中葉……時代を大きく区切った中頃なかごろ。

※前章……頭を働かせるためには意図的に忘れ、頭の中を整理することが大切と述べる。

※メタ・ノート……アイディアをメモからノートに移し、さらに時間を経ても活性化できる

アイディアをまた別のノートに移したもの。

問1 ——線 a ~ d のカタカナをそれぞれ漢字に直しなさい。

問2 ……線ア・イの意味として最もふさわしいものを次から一つずつ選び、それぞれ番号で答えなさい。

ア 比肩

- | | | |
|----------------------------|--------------------------|---------------------------|
| 1 言及 <small>げんききゅう</small> | 2 対比 | 3 突出 <small>とっしゅつ</small> |
| 4 匹敵 <small>ひつてき</small> | 5 介入 <small>かいにん</small> | |

イ あげつらう

- | | | |
|------------|-------------|----------|
| 1 明らかにすること | 2 あれこれ論じること | 3 あざ笑うこと |
| 4 泣き悲しむこと | 5 混同すること | |

問3 ▼より後の文中には改変を加えたためにつじつまのあわなくなった部分があります。それをかく含む一文をぬき出し、はじめの五字を答えなさい。

問4 空らん A C にあてはまることばとして最もふさわしいものを次から一つずつ選

び、それぞれ番号で答えなさい。

- | | | | |
|----------|--------|--------|--------|
| A 1 そのうえ | 2 むしろ | 3 やはり | 4 それでも |
| B 1 しかし | 2 もしくは | 3 かならず | 4 あるいは |
| C 1 ところが | 2 なかでも | 3 そのため | 4 つまり |

問5 空らん I にあてはまることばとして最もふさわしいものを文中よりぬき出して漢字二字で答えなさい。

問6 空らん II にあてはまることばとして最もふさわしいものを文中よりぬき出して四字で答えなさい。



(問題は次のページに続く)



2 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、《 》の部分は、中略部分をまとめたものである。

六年一組が始めた卒業研究のテーマは、「サボテンに超能力はあるか」というものであったため周囲から大きな非難をあびることになる。だがひとり、定年を控えた権藤教頭先生だけが批判を受けつつ理解を示してくれたおかげで、ちよつとした騒動を起こしながらも研究は進められた。

迎えた研究発表の日、いよいよ六年一組の順番がまわってきた。発表者の稲川信一が壇上にのぼり、その指示で会場にいる人に紙が配られ、集められた。

「それでは、一組のみんなは、集まった紙を僕のところまで持ってきてください」
言われたとおりに、子供たちは舞台上上がり、順番に、信一に紙切れを渡した。二十五枚集まると、信一はそれをきれいにそろえ、演台の鉢植えの脇に置いた。

「ではいよいよ、透視力の実験に移ります。理屈は簡単です。①今この場で、適当に選んだ人に、何の準備もしないで書いていただいた質問を、この鉢植えが読み取ります。そしてそれを、テレビパシーで僕に伝えるんです」

会場でさまざまな声が起こった。立ち上がる父母もいた。

「どうぞ席に戻ってください」信一は落ちついていった。「そして、鉢植えと僕が質問を読み取ったら、そのときは、その質問をした方が立ち上がって、当たっているかどうかを教えてください」

②信一はまず、一番上になっている紙切れを、そつと取り出した。そして、鉢植えの下に置くと、自分は緑色の葉に手を触れ、目をつぶった。

《信一は鉢植えとの交信をはじめる。》

「分かりました」信一が顔を上げた。鉢植えから手を離す。「皆さんのなかで、今年ジャイアンツが優勝するかどうか知りたいと書いた方はどなたですか？」

聴衆は辺りを見回す。ざわめきのなかで、頭をかきながら、秋山徹が立ち上がった。

「間違いありませんか？」

「うん、あっているよ」徹は答えた。「本当にそう書きましたよ」

信一は、鉢植えの下から紙を取り出した。広げて読む。うなずく。

「そうですね。あっていました。どうもありがとうございます。では、次にいきます」

また同じ手順が繰り返され、信一は言った。

「来週の日曜日、家族で箱根に行くので、あちらの方面の天気が分かればいいと思っているのはどなたですか？」

ええー！ つと、手で口をおおいながら、中ほどに座っていた女性が立ち上がった。

「大地震は本当に来るのだろうか」と書いた方はどなたでしたか」

「カタログ販売で注文したワゴンが郵送されてくる日付を知りたいのはどなたですか」

「公団住宅の抽選に当たるかどうかわかりたい方は？」

「ご自分の靴のサイズを当てて下さいと書いた方はいますか？」

こうして、二十四問、質問を書いた人物が驚きながら、苦笑しながら立ち上がるという結果になった。

二十五問目が教頭の番だった。③ 信一はすべすべした眉間にしわを寄せ、じつと鉢植えに手を置いていた。やがて言った。

「僕たちもおなじです」

教頭は、「君たちサボテンと別れるのはとっても寂しい」と書いたのだった。

《六年一組の発表は大成功のうちに終わった。そして、卒業式から一週間後、秋山徹が手紙とプレゼントを持って教頭の家を訪れた。》

「まあ、まずその手紙を読んでみてください」

なるほど、箱と一緒に手紙が一通入っている。薄いブルーの封筒に、揃いの便箋だった。文面は短かった。

「ナマハゲサボテン先生、校長先生にならないでいてくれてどうもありがとうございます」

その下に、「六年一組生徒一同」とある。

権藤教頭は、手紙を三度読んだ。それから目を上げて酒の瓶を見、徹の顔を見やった。彼は顔いっばいに笑って言った。

「植物のテレパシーなんて、嘘っぱちなんですよ。発表会の日に一組の子供たちがやったことは、トリックだったんです」

④ 「あの透視術が？」 教頭はぼかんと口を開いた。

「あのトリックは、会場にサクラが一人いれば簡単にできるものなんですよ。あの日は、僕がサクラをしてたんです。楽しかったな」

「どうやったんだ？ 紙切れに質問を書いた人たちはみんな、本当に驚いていた。私だってびっくりしたよ」

「あたりまえのことをしただけですよ。質問を書いた紙を読んで、その内容を答えたんです」

「しかし……」
「信一君は紙の内容を見なかった。鉢植えの下に伏せておきましたからね。読んだのは、答えを当てたあとのことだ。でもそれは、そう見せかけただけのことなんですよ。実際には、質問を当てるふりをするその前に、紙を読んでしまっていたんです」

会場で質問を書かせ、その紙を回収して演台に運ぶ。そのとき、サクラの書いた紙を一番下に

しておく。そして、言葉では、事前に打ち合わせして分かっていた、サクラの質問を口にするのだ。

その質問は、もちろん当たっている。サクラは驚くふりをする。そして信一は、鉢植えの下から紙切れを取り出す。その紙切れは、集めて演台に置いたとき、一番上になっていたものだ。中味を読んで、サクラの書いた質問を確認するふりをする。だが実際には、そのとき読んでいる紙切れは、別の質問者の書いたものなのだ。そしてその内容が、次に透視で当てたようにして口にする内容なのである。

「そうやって、一つずつ前にずらして読んでいくことで、中味を伏せてある質問を当てたように見せかけるわけです。これはワン・アヘッド・システムと言って、奇術の基本的なトリックなんですよ」

教頭は、感心したり呆れたりした。やれやれ、とつぶやいた。

「あの子たち、そこまで手の込んだことをして、^⑤何が目的だったんだろう。ただみんなを驚かせたかっただけだろうか」

「違いますよ。これをつくりたかったんです。つくって先生にプレゼントすることが目的だったんですよ。それにはあの鉢植えがたくさん必要だったんだけど、ただ黙ってあんなものを買いたくさんじゃ、誰かが疑うかもしれませんからね。それで、超能力だなんて口実をつくったんです」「しかし、これはいったいなんだね？」教頭は瓶を持ちあげた。

「テキーラですよ」徹は答えた。「竜舌蘭からつくる『火の酒』です」
座り込んだ教頭は、危うくその瓶を取り落としそうになった。

「子供たち、先生のおかげで、やりたいことができた。だから卒業研究で、先生にあげるものをつくろうと決めたんだそうです。で、お酒をね。あの子たち、先生の夢をちゃんと覚えていたんですよ」

この世に一つしかない酒だ。これはまさにそれだった。唯一無二の酒だった。

「あんな鉢植え、いったいどこで手に入れたのだ？」

「あの植物園ですよ。それで僕も思い出したんです。酒の原料になる植物を集めた『スピリッツ・オブ・スピリッツ』というコーナーがあつて、いろいろな苗や鉢植えを置いていて、観賞用に販売しているんです。あの子たちはそれをもっと、^ア弾力的に利用することを考えたんですね」「いやはや」教頭は手でつるりと顔を撫でた。「しかし、テキーラなんてそんなに簡単につくれるものかね？」

「それほどむずかしくはないですよ。まず、竜舌蘭の塊茎をよく蒸します」
教頭は思い出した。子供たちの研究場所が、すごい熱気と湿気だったことを。

「そして次に、よくつぶして汁を集め、発酵させます」徹は苦笑した。「この『つぶす』ところで、あの子たち、ワインとごっちゃになったらしいですね」

水浴びプールに入って飛んだり跳ねたりしていた件だ。教頭は笑ってしまった。

「足でつぶしていたのか！」

「ええ。ちゃんと、きれいに足を洗ってからやっていましたよ」

「蚊取り線香はなんのためだったのかな」

「臭いで気づかれないようにするつもりだったらしいんですけど、逆効果だったと反省していました。あの事件でもう信一君の家は使えなくなっただので、あとの[※]蒸留の作業は僕のアパートでやりました」

⑥ 教頭はぱつと目を見開いた。「ちょっと待ってくれよ。学校の理科実験室からフラスコがなくなっただのは——」

「もう返してあるはずですよ」徹はにこにこした。「本当なら、これも直接渡しに来たかったそうです。でも、発表会のお芝居が、思ったよりも話題になって、しばらく^イほどほりをさます必要ができちゃったんですよ」

「うん」教頭は頭をぬぐった。

「あ、そうだ。もう一つあるんです。忘れちゃいけない」

徹は庭を横切り、とめてある車に近寄っていった。窓から手を突っ込むと、あの鉢植えをつかんで取り出した。

「これ、信一君が持っていたものです。これだけはテキーラにしなかったから、ほら」

教頭は鉢植えを手にした。^⑦ その不恰好な葉のなかに、一つだけぼつり、赤い花がついている。

「竜舌蘭は、一生に一度しか花をつけないんだそうですよ」と、徹が言った。

権藤教頭は、じつと、テキーラを、花を、手紙を見つめた。

「校長先生にならないでいてくれて……ありがとう」

その文字がぼやけてしまって、しようがなかった。

(宮部みゆき「サボテンの花」より)

※蒸留……液体を熱して生じた蒸気を、ふたたび冷やして液体にすること。

問1 ……線ア・イの意味として最もふさわしいものを次から一つずつ選び、それぞれ番号で答えなさい。

ア 「弾力的に」

- 1 前向きになって
- 2 柔軟にとらえて
- 3 思うぞんぶんに
- 4 いちかばちかで
- 5 これ以上はなく

イ 「ほとぼりをさます」

- 1 研究発表の余韻よいんを楽しむ
- 2 かつとなった頭を冷やす
- 3 きちんとした弁明をする
- 4 騒さわぎが落ち着くのを待つ
- 5 しつかりと準備を整える

問2 ……線①「今この場で、適当に……書いていただいた質問」とありますが、「適当に選んだ人」は、教頭をのぞいて何人ですか。数字で答えなさい。

問3 ……線②「信一はまず、一番上になっている紙切れを、そつと取り出した」とありますが、この「紙切れ」に書かれてあったのはどういうことですか。その内容がわかる一文のはじめの五字をぬき出しなさい。

問4 ……線③「信一はすべすべした眉間にしわを寄せ、じつと鉢植えに手を置いていた」とありますが、これはどういう行こうい為と考えられますか。その説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 いつものように鉢植えの実験を成功させようと、心を集中している。
- 2 研究の成果がきちんと伝わっているか、自分自身で振り返っている。
- 3 鉢植えと交信するため、じつと集中しているかのように演じている。
- 4 聴衆に注目されてしまうなかで、平常心を失ってしまっている。
- 5 教頭の書いた内容が的はずれだったので、いかりを覚えている。

問5 —— 線④「教頭はぼかんと口を開いた」とありますが、この時の気持ちとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 子供たちがまたもとんでもないことをしてくれたと思い、らくたん落胆している。
- 2 子供たちはなんとたくみに聴衆の関心をひいたものだと、かんとん感嘆している。
- 3 子供たちは一体どうやって聴衆の目をあざむいたのかと、ぼうぜん呆然としている。
- 4 子供たちの悪事に協力するかたちとなってしまったことを、こうかい後悔している。
- 5 子供たちがなぜ人びとをだますようなことをしたのか、不快に感じている。

問6 —— 線⑤「何が目的だったんだろう」とありますが、子供たちの目的はどういうことにあるのですか。二十字以内で答えなさい。

問7 —— 線⑥「教頭はぼつと目を見開いた」とありますが、なぜですか。その理由として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 子供たちのいたずらを止められなかったから。
- 2 フラスコがなくなった理由に気がついたから。
- 3 子供たちのおこなう研究を見くびっていたから。
- 4 フラスコのかんしつ紛失という事実を初めて知ったから。
- 5 徹が子供たちのことをすべて理解しているから。

問8 —— 線⑦「その不恰好な葉の……赤い花がついている」とありますが、子供たちの考えでは、これは何を表していることになりますか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 子供たち自身が遂げた成長
- 2 サボテンに秘められた生命力
- 3 権藤教頭の深い愛情や人がら
- 4 希望に満ち満ちた中学校生活
- 5 権藤教頭の穏やかな隠居生活

問9 「権藤教頭」に関する説明としてふさわしいものを次から二つ選び、番号で答えなさい。

- 1 子供たちの卒業研究の意図を見ぬきながら、あえて叱^{しか}つたり止めようとしたりせず、子供たちのやりたいことをやらせようとした。
- 2 教師としての立場にとらわれることなく、六年一組の卒業研究に対して陰^{かげ}からささえたりともに作業に取り組んだりした。
- 3 権藤教頭は教頭職にとどまったまま校長に昇進することなく退職したが、そのことで子供たちからの感謝を受けた。
- 4 教頭という立場上、子供たちの暴走をおさえなければならぬため、秋山徹^{たの}に頼んで子供たちの行動を見はつてもらった。
- 5 子供たちにとっては、自らの夢を語ってくれるうえに、あだ名で呼んでも受け入れてくれるような親しみの持てる人であった。
- 6 まもなく定年を迎えることになっていた権藤教頭は、子供たちが問題を起こしてしまったので、その責任をとることになった。

(問題は次のページに続く)



3 次の詩を読んで、後の問いに答えなさい。

A の歌 中原道夫

おまえを確かめるために
おまえを手のひらにのせると
おまえは儂く消える
小さな僕ぼくの手のぬくもりに

僕はおまえにくちづけをする
おまえを肌はだで感じるために
けれど僕の唇くちびるには
おまえではない
いくらかの水すい滴てきがつくだけだ

空から落ちてくる大きな力
それはこんなにも B ものなのだろうか

ああ けれど人よ
僕ぼくはあの ① 雪解けの麦の緑に
すべての樹き々の若葉わかばの中に
② 姿をかえたおまえの姿を
確かにこの眼めでみたのだ

問1 空らん A には詩中の「おまえ」にあたるものが入ります。漢字一字で答えなさい。

問2 この詩の第一連で使用されている表現技法として、最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 呼びかけ
- 2 対句たいく
- 3 倒置法とうちほう
- 4 隠喩いんゆ
- 5 体言止め

問3 この詩の第三連では第一連と第二連で述べられた様子について感想を述べています。

B にあてはまることばを詩中から探し、ふさわしい形にかえて答えなさい。

問4 ——線①「雪解け」とありますが、次の俳句はこのことばを季語として詠まれたものです。
この俳句の季節を漢字一字で答えなさい。

雪解けて 村一ぱいの 子どもかな 小林一茶

問5 ——線②「姿をかえたおまえの姿を／確かにこの眼でみたのだ」とはどういうことですか。
その説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 「おまえ」から生命の源としての力を感じているということ。
- 2 「おまえ」が消えゆく寂さびしさを実感しているということ。
- 3 「僕」が雪解けのもたらす解放感に満たされているということ。
- 4 「僕」が季節の移り変わりのまったただ中にいるということ。

4 次の問題に答えなさい。

問1 ①～④の説明にあてはまる漢字をそれぞれ答えなさい。

① 肉を表す字を二つ重ねてできた会意文字。
数や量がたくさんある、物事がくり返して何度も起こる、という意味で用いる。一部を
とって同音のカタカナとしても用いられる。画数は六画。

② 部首「たま」(Ⅱ)二つの宝石を紐ひもで結んだ状態じゆんに、音と意味を表す部分を加えてできた
会意形声文字。

「道」とともに用いて「ことわり」、「整」とともに用いると「おさめる」の意味になる。

③ 衣ころものえりの形とそのえりとえりとの間に入れ墨すみしたことを表す象形文字。

「あや」という読みは「模様」「飾りかざり」のこと。「言葉」「手紙」の意味で用いられること
もある。また、古くは「お金」や「大きさ」の単位としても使われた。

④ 部首「とます」(ㇿ)に、穀物を入れることを表す会意文字。
そこから「量りょうを」はかる「かぞえる」「推し測おしかる」などの意味になる。また、「もとに
なるもの」「手当・代金」などの意味で用いられることもある。

問2 問1の①～④の漢字をすべて書名に含む童話の作者はだれですか。ふさわしいものを次か
ら一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 芥川龍之介
- 2 夏目漱石
- 3 樋口一葉
- 4 宮沢賢治
- 5 川端康成

